

## 復興支援フォーラムニュース No. 138

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先> 今野順夫 ([tkonno67@gmail.com](mailto:tkonno67@gmail.com))

【第136回ふくしま復興支援フォーラム/2018年9月26日・A0Z 大活動室1】

### 避難女性農業者による食と農の再建の模索

—浪江での暮らしを取り戻したいだけ—

石井 絹江 (石井農園)

1. 震災前の浪江町
2. かーちゃんプロジェクトでの弁当作り
3. 家族のなやみ (仮設住宅) 等
4. 農園の立ち上げ
5. 2年後のなみえ道の駅に向けて
6. 元町長馬場有の思い
7. そして今 これから

【資料】 『<食といのち>をひらく女性たち』(佐藤一子他編著・農文協) から  
P. 102～105

(2) 浪江での暮らしを取り戻したいだけ——石井絹江さん (福島県浪江町)

「かープロ」のメンバーだった浪江町津島地区の石井絹江さん(65歳)は、プロジェクトの終了後、避難先の福島市内に農地と加工所を確保して加工活動を開始している。特に力を入れているのは、じゅうねん(エゴマ)の栽培と加工品づくりである。じゅうねんは、石井さんが浪江町職員だったときに町農業の活性化と耕作放棄地解消のために振興していた作目であった。石井さんは、高齢者にじゅうねんの種を提供し、空いている土地に植えてもらう「一人一畝歩運動」に1990年代後半より取り組み、津島地区住民の出資による「つしま活性化企業組合」(2005年)の設立を支援するなど加工所と直売所の経営にかかわってきた。いま、石井さんは、故郷の浪江町で

再びじゅうねんの作付けに取り組もうとしている。

浪江町は2017年3月末日に帰還困難区域を除き避難指示が解除されたが、2017年7月末現在で町に帰還した人は152人で（2011年3月11日現在の住民登録人口2万1434人）、大半の住民は福島市や郡山市、いわき市といった避難先での生活を続けている。県外居住者も6318人にのぼり、広域避難の状況は変わってない。被災者の多くはすでに避難先に生活の拠点を移しており、避難指示が解除されたとしてもすぐに故郷に戻れるわけではなく、また、除染やインフラ整備も不十分なままでの帰還政策に対し不安をもつ住民は数多い。帰還意向調査によれば、「すぐに・いずれ戻りたい」と回答した住民（全体の17.5%）は中高年世代が中心で、30歳代以下の住民の7割は「戻らないと決めている」と回答している。また、将来「浪江町で農業を営みたい」と回答した農業者は10.3%にとどまり、「浪江町でもう農業はしない」（42.7%）、「判断がつかない」（42.4%）が多くを占めている。除染後の農地については、行政区単位で組織された復興組合が草刈りなどの保全管理活動を実施しているが、帰還困難区域への立ち入り禁止のバリケードが建ち並び、除染で剥ぎ取った表土入りのフレコンバックがかつての優良農地に山積みされた状況をみると、被災地での本格的な営農再開までにはまだ相当の時間を要すると言わざるを得ない。

このようななか、石井さんは、2016年に浪江町内の除染済みの農地を20a 借り入れ、じゅうねん栽培を開始した。2017年度にはさらに50a を借入し、企業組合の仲間らとともに避難先から浪江町に通って作業をしている。かつて「一人一畝歩運動」に取り組んでいたとき、最も積極的にかかわり、じゅうねんをきれいにつくってくれた老人クラブのお年寄りだった。そしていま、避難指示が解除されても地元に戻るのが高齢者だけならば、かつてのように高齢者が元気にかかわれるじゅうねん栽培に再び取り組みたいという思いからである。

石井さんは、避難先で浪江町民と会うと「もう浪江の話はしたくない」と言われることがあるという。「あのときの恐怖がよみがえるから思い出したくないんでしょうね。後になって、放射能がとても高かったことがテレビや新聞でわかり、自分たちは見捨てられた、あれは何だったんだ、という恐怖と怒り」が、いまでも住民に根強く存在している。だからこそ石井さんは、バラバラになった浪江町民を「食」を通してつなぐ取り組みをしていきたいという。

「最初からあきらめてしまうのではなく、何を食いたい、何を家族に食べさせたいか、ってところからまず考えようって、皆と話しているのよ。自分がやりたいことは、浪江での暮らしを取り戻したいだけ。お店に行って産地がどこかわからないもの、放射能検査しているのかもわからないようなものを買うのではなくて、毎日汗水流して、旬のものを自分でつくっておいしく食べたい。何よりも、浪江のお年寄りに身体にいいものを食べてもらって健康になってほしいから。」

浪江町農業委員でもある石井さんは、原発事故により失ってしまった地域の伝統食を次世代につなごうと、「浪江町の郷土料理を愛する会」を仲間とともに立ち上げ、浪江の農家が「こじはん」（おやつ）として食べていた「かぼちゃまんじゅう」の調理講習を中学校で行うほか、「浪江まち物語伝え隊」を結成し、3.11後体験した被災地の現実を紙芝居で伝えようと全国を歩いている。

このような活動へと彼女を突き動かしているのは、「福島をいまを発信したい」という強い思いである。避難指示の解除は賠償および避難者支援の打ち切りを意味するが、帰還後の高齢者の生活サポートや長期化する避難生活の支援など取り組むべき課題はいま以上に拡大していく。まるで大震災も原発事故もなかったかのように原発の再稼働が進められるなかで、それでも「なかつ

たことにはしたくない」という彼女たちの声は、あれだけの大事故を経験しても性懲りもなく以前と同じ道を突き進もうとする日本社会へのメッセージでもある。

そして、こうした女性たちからのメッセージに呼応するように、実際に福島を訪れ、福島の復興にかかわり、ひいては福島での定住を目指す女性移住者の姿もあちらこちらにみられるようになった。有機農業や特産品づくり、古民家再生、観光ツアーなどさまざまな地域おこしにかかわる彼女たちに共通するのは、食とエネルギーへの強い問題意識である。3.11後、なぜ彼女たちは、仕事や暮らしの場として福島をあえて選んだのか、3名の事例を以下で紹介したい。



### <第135回ふくしま復興支援フォーラムでのご意見等>

2018年9月8日(土)、福島市AOZで、第135回ふくしま復興支援フォーラムを開催しました。

杉岡誠氏(飯舘村復興対策課農政第一係長)から、「飯舘村『農』の再生に向けて」をテーマに、報告していただきました。土曜日の夕方という時間帯ですが、41名の市民が参加し、熱心な質疑応答が続きました。

同会場で、文書提出されたご意見・ご感想は以下の通りです。参考にしてください。

~~~~~

★ 震災から現在に至るまでの飯舘の農の話を手直接聞くことができ、とても良い機会だった。飯舘の人が望む「農」が、常に先に進んでいけるよう願っています。(S.M)

★ 属地から属人への農業支援の発想の転換や、「除染に厳しい人ほど農業再開」など、興味深いお話でした。県、国との交渉、さぞ大変でしょうが、どうぞ独自路線を。(M.K)

★ 貴重な体験に基づく実践のお話をありがとうございました。福島大学食農学類の実践教育のなかで、産業振興のお手伝いをさせていただければ幸いです。(S.A)

★ 汚染土(フレコンバック)があるうちは、農地保全を含む補助金等を継続すべき。H32までと納得してはいけない。全村農業再開できる体制(土地)になるまでは、強く、国・県に要望する。(H.Y)

★ 飯舘村の被災時からの現状が良くわかりました。村長の方針には賛成できませんが、何とか未来に向かって欲しいと思います。(K.K)

★ 「農業」の再生ではなく「農」の再生とされた理由が理解できました。しかしながら、将来を考えますと。再生/復興させるべき対象には、やはり「業」がついている必要があると思います。シャカに説法とは存じますが。(J.K)

★ 相当つらい状況を経て、ようやく飯舘村の農業が再スタートしているのだなと思います。国や県との衝突や村内での対立なども多々あった(今でもある?)のかもしれませんが、そうした部分はさらりと説明しながら、かなり前向きに村の農政を進めていらっしゃるのだなと、感心しました。(N.O)

★ 営農再開ビジョンについて分かりやすく、村民と共に村づくりしている事が素晴らしいですね。飯舘村の先人の知恵を次の世代につないで行って欲しい。飯舘村大好きです。(K.I)

★ 原発事故に伴ない被災した営農活動の再生を聞けて、積極的な行政側（村）の取り組みの姿が良くわかりました。（K.F）

★ 論理的かつデータに基づいた、非常にわかりやすい話でした。飯舘村に興味・関心があったので、今回のセミナーに参加できて良かった、このようなテーマの講演を聞くのは始めてであったが、杉岡さんが将来をよく見すえてポジティブに捉えていることが、何よりも嬉しいこと。（J.K）

★ 農家の方が、原発事故さえなかったらと書き置きをして亡くなったのを思い出しますが、絶望しない方はすばらしいと思います。飯舘村は3.11以前には畜産の循環型農業だったと聞きましたが、方向転換していると思いました。60歳～70歳台の人ががんばって、農業再開していることが、さしあたっては明るい話題と思いますが、今後もっと若い世代が引き継がないと村の存続が厳しいですね。平成32年度で復興創生期間が終わるとされているとのこと、その間にうまくいけば良いのですが・・・。（S.S）

★ 営農再開に向けての、並々ならぬご努力とそれを受けての村民の方々の、前向きな気持ちや「飯舘村 営農再開ビジョン」パンフレットに記された言葉に、大いに感銘を受けました。（S.S）

★ 人間と原発は決して共存できないことを、改めて感じました。（M.S）

◆◆◆◆【会場カンパありがとうございました】◆◆◆◆

第135回ふくしま復興支援フォーラム(9月8日)の会場で、カンパ8,900円をお寄せいただき、ありがとうございました。ご報告とともに、御礼申し上げます。（今野）

【会計報告】（2018.9.25現在）

第1期（～2015.9）累計 収入214,746円 支出207,640円 残（繰越）7,106円

第2期（2016.10.27～）

|                      |          |                   |
|----------------------|----------|-------------------|
| 「収入」（2018.8.22までの累計） | 151,443円 | （第1期 繰越 7,106円含む） |
| 会場カンパ(2018.9.8)      | 8,900円   |                   |
| 計                    | 160,343円 |                   |
| 「支出」（2018.8.8まで累計）   | 115,280円 |                   |
| 計                    | 115,280円 |                   |
| 「残金（現在高）」 2018.9.25  | 45,063円  |                   |

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

<予告>

第137回（2018年10月10日（水） 18時30分～20時30分

テーマ 「課題先進地における住民主体の取り組み」

報告者 菅波香織氏（未来会議事務局長）、平山勉氏（双葉未来会議代表）

会場 福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」

大活動室1 MAXふくしま4F（福島市曾根田町1-18）